

## 発掘調査の概要

### 甘樺丘東麓遺跡の調査(飛鳥藤原第171次)

甘樺丘東麓遺跡の発掘調査は小規模なものも含めると今回で9回目になります。これまでの調査で、7世紀から8世紀にかけて、谷の埋め立てなど大規模な造成とともに活発な土地利用がおこなわれていたことが明らかになっています。

また、『日本書紀』によると皇極天皇3年(644)、甘樺丘に蘇我蝦夷・入鹿親子の邸宅が建てられたことが記されており、蘇我氏の邸宅と当遺跡との関連についても、関心を集めています。

今回の調査では、丘陵裾部の土地利用状況の解明と2009年度の調査で一部見つかっていた谷部の炭・焼土層の性格解明を目的としています。調査区を谷の出口付近に設定し、2011年9月22日から調査を始めました。

丘陵裾部の調査では、柱穴数基を検出しましたが、大部分は近世の段畑造成時に削平を受けており、古代の遺構は柱穴以外に確認できませんでした。谷部の調査では、谷の斜面に切り土や埋め立てにより平坦面を作っており、そこでは火を受けて地面が赤色化・硬化した痕跡が見つかりました。これらの被熱面の上には焼土・炭・土器片を含む炭混じり層が堆積し、その後、一気に谷を埋め立てている状況が明らかになりました。

出土した遺物から見て、この谷を埋め立てたのは7世紀中ごろのことであり、谷の平坦面で火を使用したのはこの直前のことであったとみられます。

この平坦面および、赤色化・硬化した遺構の性格解明に向けて、都城発掘調査部一丸となって慎重な検討を進めています。(都城発掘調査部 小田 裕樹)



赤色化した被熱面の検出状況（南東から）

### 檜隈寺の調査(飛鳥藤原第172次)

国営飛鳥歴史公園(キトラ古墳周辺地区)の整備工事が本格化するなか、今年度も檜隈寺周辺の調査をおこないました。今回は、以前から建物跡と想定されていた、中心伽藍南東方向にある土壇状の高まりを含めた調査区について報告します。

調査では、土壇状部分で、大型の柱穴を2基確認しました。2基の柱穴(掘方)の大きさや形は、およそ1辺1.5~1.8mの矩形をなし、深さ1.2mで、ともに柱根が残存していました。柱根間の芯々距離は約2.7m、柱根は直径約70cmもの太さです。2基を結ぶと、その方位は檜隈寺中心伽藍の方位の振れと一致し、さらに塔の中軸線がこの2基の間を通ると見ることができます。柱根の太さ、方位の振れ、位置を勘案すると檜隈寺に関わる施設の柱穴と見て良さそうですが、柱穴掘方からは、平安時代の土器が出土しました。したがって、7世紀頃の檜隈寺にともなうものではなく、重要文化財に指定されている、於美阿志神社石塔婆にともなうと考えられます。

この十三重の石塔婆(十一重現存)は、その様式から平安時代後期の作と推定されており、檜隈寺塔跡の中心に建っています。

柱穴はこの2基の他に関係する穴は確認されませんでした。したがって、屋根が架かるような建造物ではなく、幢竿支柱(儀式に際して幡や旗を付けた竿を支える柱)の可能性が高いと見ています。

檜隈寺を氏寺としたと見られる東漢氏は、柱建を競う儀式で高く太い柱を建てたので、「大柱直」と呼ばれたと、『日本書紀』(推古28年条)に記されています。今回の柱根は、年代的に直接この記事には関係しませんが、「大柱直」の心意気を感じさせる柱根と言えるでしょう。

(都城発掘調査部 黒坂 貴裕)



大型柱穴2基（南東から）